

「英語で教える英語授業」についての一考察

著者	チェンバレン 暁子
雑誌名	聖学院大学総合研究所Newsletter
巻	Vol.23
号	No.3
ページ	5-7
URL	http://id.nii.ac.jp/1477/00002733/

Title	「英語で教える英語授業」についての一考察
Author(s)	チェンバレン, 暁子
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.23-No.3, 2014.3 : 5-7
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=4976
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archive

「英語で教える英語授業」についての一考察

チェンバレン 暁子

はじめに：

国際社会のグローバル化に伴い英語の需要が高まる中、平成25年度より高校新教育課程では「英語の授業は英語で行うことを基本とする」という方針が示され、マスコミなどで大きく報道され、賛否両論の議論が盛んに行われるようになった。

嘗て多くの日本の中学校・高校では、日本人教員による訳読・文法学習が中心の英語授業が行われ、中には完全に日本語しか聞こえてこない英語授業すら存在した。英語コミュニケーション能力を育てるためには、十分な英語インプットや運用の機会が不可欠であり、できるだけ授業の中では、教員も学生も英語でコミュニケーションをとることのできる授業を行うべきであるという主張がなされるようになったのは尤もなことである。

しかし、英語のみで行われる授業はどれほど学習者にとって有効なのだろうか。特にどの学習レベルの学生にも一様に適用されるべき教授方法なのであろうか。筆者は約2年半前から、英語リスニングやスピーキングの授業を主に担当するようになった。殆どの教員は英語のNative Speakerが教員で、授業はほぼ全て英語で行われている。私が授業を担当するようになり、「日本語を使える先生で良かった。これまで授業は全て英語で行われ、授業に全くついてゆけずとても困った」とこぼす学生に出逢うことが幾度かあった。近年、高校だけではなく、多くの大学に於いても、英語授業は英語だけで行うよう求める大学が増えてきている。無論、学生の英語能力が一定以上のレベルにあれば、英語だけで行われる授業は学生にとって、とても有益な授業となるであろうことは理解できる。しかし、そのような授業は、初級レベルの英語学習者にとっても有効なのだろうか。初級レベルの学習者の場合、英語だけの授業はどの程度理解しているのだろうか。また、英語だけの指示や説明

を理解できない場合、どのようにして解決しているのだろうか。更に、日本語で補助をするとしたら、どのような場合に行うことが有効なのだろうか。本論においては、英語だけで行われる授業に関してアンケート調査を実施し、以上の項目に関しての分析と考察を行った。

先行研究：

Krashenは「言語習得の必要充分条件は理解可能なインプットである」というインプット仮説を提唱し、「メッセージを理解することで、無意識的な習得が起こる」(Krashen, 1985)と唱えている。しかし、第二言語習得の場合、意識的な学習によって習得される部分も大きく、インプットだけで習得がおこるという彼の仮説は必ずしも当てはまらないのではないかと考えられる。また、「言語はある程度意識的学習を積み、何度も練習を繰り返すうちに、自動化して注意を払わなくても無意識にできるようになる。」(白井、2008 p.108, 111)とも言われている。また、国内での多数の学校での英語教育の現場では、海外留学などで長期に滞在するなどの機会を除いて自然習得できるだけのインプットを学習者が得る事は極めて難しい。そのため、どうしても多量のインプットの中、無意識的学習のみで第二言語を習得できる状況からは程遠いと言わざるを得ない。よって意識的学習も重要な位置を占めると考えられる。また、Krashenが述べているように、インプットは学習者の理解可能なものでなければ効果は期待できない。特に、初級学習者の場合、発話のスピード、文法や語彙等はかなりコントロールされたインプットでなければならない。Cook (2001) は、L1 習得とL2 習得の習得方法の違いに着目し、L1 の知識を有するL2 学習者が母語の補助を排除するEnglish Onlyの授業に疑問を呈している。

また、大谷 (2013) によれば、英語と日本語の

言語間の距離を考慮した場合、英語とフランス語を1～2とすると、日本語と英語の距離は10であり、中国語と英語間は5～7、と英語と日本語との言語間の距離は非常に大きく、その結果、日本人の英語習得自体が、他言語を母語とする英語学習者より非常に困難であると述べている。Duff & Polio (1990) がUCLAの13種類の外国語科目（フランス語、アラビア語、日本語など）でのFL（外国語）とL1（英語）の使用についての調査をした結果、やはり言語間の距離は、それぞれの使用の割合に影響を与え、言語間の近い外国語の場合はFLオンリーで授業を行う傾向にあり、その反対の場合はL1の使用が増えることが判明したことを報告している。また、初級の場合、授業への不安も大きくL1の使用で授業に対する不安感も緩和していると述べている。

調査と考察：

英語を外国語として非常に限られた時間とインプットの中で、効果的に学習を行うには、どのようなあり方が理想なのだろうか。以下のアンケート調査は、大学一年生の「Speaking I」の科目を受講した学生に対し行われた。授業は原則的に英語のみで行われた。（点数はTOEIC換算点数）

G 1	200～300点未満	21名
G 2	300～350点前後	26名
G 3	350～400点前後	35名

a 英語のみで行われた授業の理解度

	約90%以上	約70～80%	約50～60%	約50%以下
G 1	4%	33%	47%	16%
G 2	4%	38%	42%	16%
G 3	0%	65%	42%	10%

G1、G2は理解度が60%以下が60%前後にとどまる一方、G3では70～80%が、65%と当然ながら理解度は上がっている。

b 英語のみで授業を希望する割合

G 1	15%
G 2	15%
G 3	26%

理解度に比例し、英語のみでの授業を希望するのはG3が最も多く、およそ4人に1名は英語のみでの授業に肯定的である一方、G1、G2では、僅か15%しか希望していない事が分かる。

c. 日本語の補助があった方がよいか

G 1	85%
G 2	85%
G 3	74%

G1、G2では8割以上の学生が日本語の補助を必要とし、G3でも7割以上の学生が必要と感じている。

授業内での希望する英語の割合

	100%	80%	60%	約50%以下
G 1	19%	10%	29%	29%
G 2	15%	27%	35%	27%
G 3	26%	48%	17%	9%

G1、G2は授業での英語の使用を50～60%あるいはそれ以下を希望する学生が最も多い。一方、G3は80%以上の英語の使用を希望する学生は74%にのぼり、100%英語で行って欲しいと希望する学生も26%おり、授業内での英語の使用を希望する学生が多いことが分かる。英語の習熟度が上がるにつれて、理解度も上昇し、このような結果になると思われる。

d. 英語のみの授業で良かったこと

G1. 教師が英語しか使わないので、何とか英語で話そうとした。英語だけで困ったが、会話力が少しついた気がする。

G2. 英語の正しい発音やイントネーションの勉強ができた。英語だけで理解するのは大変だが、リスニング力はアップしたような気がする。

G3. 英語の正しい発音が聞けた。英語だけで理解するのは大変だが、とてもためになる。

e. 英語のみの授業で困った事

G1. 授業で困った事：教員が何を言っているか分からなくてもどんどん進んでしまう。

解決方法→友人に尋ねたり、友人と協力した。何度も教員に質問した。教員がジェスチャーや日本語で説明した。

G2. 授業で困った事：英語の指示が分からず、何をしたいのか全くわからず困った。ほぼ全て、理解している友人に頼らなくてはならず困った。課題の箇所がわからない。問題があっても教員とコミュニケーションが取れない。

解決方法→友人や教員に尋ねる。辞書で調べる。友人も理解できない場合は、ひたすら待つ。

G3. 問題点：質問しても教員の説明が英語なので理解できない。分からない単語や表現があるとき。教員に伝えたいことがあっても伝わらないので、教員と距離ができる。課題の箇所が分からない。

解決方法→教員、友人に尋ねる。辞書などで調べる。(指示が分からない場合) 周囲の様子で判断する。

全てのグループで、理解できない時には分かっている学生に尋ねるという解答が多く、また教員に何度も尋ねるという解答も多く見られた。特に、初級レベルの場合は、教員に質問する事自体が難しく、教員とのコミュニケーションが取れず問題を抱えたまま授業を受け続けるケースもある事が判明した。

f. 特に日本語の補助が欲しい時

・わからなくて質問している時にはL1での説明をしてほしい。

・文法や難解な語彙、表現などの説明。

・重要なアナウンス（課題・試験など）

結語：

アンケート調査により、英語授業の中での英語の使用率は学生の習熟度に配慮しながら導入する必要があると思われる事が分かった。また、英語を使用する場合、教員の発話のスピードや使用語

彙・文法などに関しても、習熟度に応じて十分な配慮が必要である。特に初級レベルの場合、繰り返しや、パラフレーズ、絵や写真の使用なども必要に応じて利用するなどの工夫が必要である。

できるだけ、充実した英語のインプットが必要であること、そして英語オンリーという環境に学習者を置き、学習者からの発話を促しコミュニケーション能力を培わせるという方針の趣旨は充分理解できるが、学習者の習熟度に併せて十分な配慮と工夫がなければ、本来の目的に反する結果になってしまう可能性もあるため、学習者の理解度に充分配慮しながら導入されるべきである。

参考文献：

- Alderman, Donald L. & Holland, Paul W. (1980) *Item Performance across Native Language Groups on the Test of English as Foreign Language*. Princeton: Educational Testing Service
- Krashen, Stephen. (1985) *Input Hypothesis: Issue and Implication*. London, Longman, 106-108
- Duff, P & Ooloo, C. (1990) How Much Foreign Language Is There in the Foreign Language Classroom? *The Modern Language Journal*, 74, ii, 154-166
- Cook, V. (2001) Using the first language in the Classroom. *Canadian Modern Language Review*, 57, 402-423
- 白井恭弘 (2008) 『外国語学習の科学——第二言語習得論とは何か』 岩波書店
- 寺島隆吉 (2009) 『英語で授業のイデオロギー 英語教育が亡びるとき』 明石書店
- 大津由紀雄, 他. (2013) 『英語教育, 迫り来る破綻』 ひつじ書房
- 大谷泰照 (2014) 「日本人と『英語』との距離 英語教育のあり方を考える前に」『英語教育』Vol.62 No.11, 10-12

(ちえんばれん・あきこ 聖学院大学基礎総合教育部特任講師)